

小説
無人島レスト
ラン

前編

赤鈴

真相究明

「暇だなあ」

そう言うと、高岡は大きな欠伸を漏らした。

「夏休みで大学も休みだしな」

山本がめんどくさそうに答える。

「折角の夏休みだしさ、二人でどこか行かねえ？」

「”どこか”ってどこだよ。だいたい今からじゃどこも人でいっぱいだよ。疲れるだけだっけの」

少し間をおいた後に、高岡がなにかを思い出したかのように喋り出す。

「お前さ、”神隠しの島”って知ってるか？」

「神隠し？」

「ああ、地元の間人なら絶対に近づかない、結構大きな無人島なんだけどさ、島に入った人間が忽然(こつぜん)と消えるらしいんだよ」

「なんだよそれ。どうせどこかの馬鹿が流した、ただの噂だろ」

山本は、高岡の話をお遮(さえぎ)るかのように答えた。

「それがさ、そうでもないんだよ」

「どういうことだよ」

山本は、高岡の方へと向き直った。

「その島があるところってのが俺の地元なんだけどさ、うちの親父もその島の近くで行方不明になってるんだよ。腕利きの猟師でさ、評判だったのに」

「嵐か、なにかに巻き込まれたんじゃないか？」

「その日は天候も穏やかで、嵐どころか、絶好のコンディションのはずだったんだよ。”ちょっと出かけてくる”って行ったきり、帰ってこなかったよ」

高岡は神妙な面持ちで、少しの間黙り込んでしまう。

「で、その”神隠しの島”ってのに何しに行くんだよ」

「確かめたいんだよ。真相を」

「真相を確かめるってお前・・・」

「頼むよ！親友だろ？俺達」

懇願するような目で、山本の目を見つめる。

「分かったよ。どうせ暇だしな。肝試しと思えば、なんだか面白そうだし」

「恩にきるよ！心の友よ！！」

山本の体を両手で強く抱きしめた。

山本は驚きの表情を隠せない。

「離れろ！気持ち悪い！！」

そしてその日の夜のうちに、神隠しの島があるという高岡の地元へと、山本の運転で車を走ら

せた。

高岡の地元へは、山本の住んでいるアパートから車でおよそ3時間ほどの場所にある。

「やっと着いたな」

山本が船着場近くに車を止め、二人は静かに車から降りる。

時刻は深夜の2時。周囲は常闇に包まれていた。

「で、島まではどうやって行くんだよ」

「船を使う」

「船！？お前運転できんのかよ！てか、誰の船を使うんだよ！」

「船は地元の知り合いのを貸してもらう。運転は親父のを見てたからなんとなく分かる。たぶん」

「たぶんってなんだよ！本当に大丈夫なのか？」

「任せろ！泥船に乗ったつもりでいなさい！」

「沈むだろ。それ」

こうして二人は馬鹿話をしながら、半ば冒険気分で神隠しの島と呼ばれる無人島へと向かった。

これから二人を待ち受ける悲劇と恐怖も知らずに。

後編へ続く。